

## テレビあれこれ

特別講義でテレビ制作論の講義を始めたのは芸術文化学科にマンガアニメーションコースがスタートした年から、早いもので五年が経過した。

学生へのシラバス「講義の概要・ねらい」に私は次のように書いた。テレビについて、その生い立ちや変遷など概念や歴史を学ぶとともに、番組制作の基本を解説してゆく。日本でテレビ放送が始まって既に五十年以上、テレビは生活の一部になっている。ニュースをはじめ、ワイドショー、芸能バラエティー、ドラマ、スポーツ中継など、テレビ番組のあらゆるジャンルを検証すると同時に、テレビのデジタル化を考察し、テレビ表現の魅力を一緒に考える。テレビと通信の融合については、最新の情報を駆使し解説する。また、学生へのメッセージとして、テレビを娯楽としてではなく、学問的に考察する。しかし、堅苦しい講義ではなく、テレビのウラ話やビデオ視聴をふんだんに取り入れ、楽しく授業を進めると付け加えた。

具体的な講義の内容は「テレビの生い立ち」から始まり、「テレビ番組と編成の五十五年」、「NHKと商業放送」、「世界のテレビ事情」、「報道ニュース」、「スポーツ番組」、「ドキュメンタリー」、「メディアアリテラシー」、「CMと視聴率」、

「子どもとメディア」、「ワイドショーの現状」など多岐にわたっている。

テレビの生い立ちを振り返ると、NHKがテレビ放送を開始したのは一九五三年（昭和二十八年）二月一日、開局記念番組で古垣会長は「ある国のテレビの番組を見ると、その国の文化水準が分かる。テレビの番組というものは、そういうものではないか。あるいは、そういうものにしたいい。」と挨拶した。また、半年遅れで開局したNTV日本テレビの開局記念式で、正力社長は「民放（民間放送）は国民に健全娯楽を提供する。そういうものになりたい。」と述べている。二人の挨拶から健全娯楽は文化であり、テレビは文化であるべきと開局当時の意気込みをうかがい知ることが出来る。

日本テレビは開局時、東京・新橋駅西口広場、浅草観音境内など五十カ所に恒常的に大型テレビを置き、テレビのPRにつとめた。新橋駅西口には二万人の群衆が詰めかけたといわれている。テレビが放送を開始して二年後、NHKが六万八千の受信契約者の職業を調べたところ、人が集まる喫茶店、食堂、美容院などが四五%、会社役員、芸術家などが三五%であり、喫茶店や食堂の入口には「テレ

「ビ受像中」の張り紙がさげられていた。

その後、一九五九年（昭和三十四年）の皇太子（現天皇陛下）のご成婚を経て、一九六四年（昭和三十九年）の東京オリンピックで家庭のテレビ契約台数が飛躍的に増加した。テレビが放送を開始して五十七年、わずか半世紀の間に番組内容は勿論、技術革新は目を見張るものがあり、二〇一一年（平成二十三年）七月二十四日にはアナログ放送を停止し、地上デジタル放送に完全に移行する。

別府大学で行っているテレビ制作論では、テレビ番組をジャンルごとに検証することは勿論だが、現在放送されている番組を表面的に論評するだけではなく、視聴者が「テレビといかに向き合うか」視聴者が「どういうスタンスでテレビを見ればよいか」という根本的な問題についても講義で取り上げた。

講義のタイトルは「メディアアリテラシー (Media Literacy)」。「メディアアリテラシー」とはメディア(テレビ)を読み解き、使いこなす能力。メディア(テレビ)が送り出す情報が、テレビを見る人(視聴者)に大きく影響を与えているが、視聴者はメディアが送り出す情報(番組)を単に受け入れるのではなく、メディア(テレビ番組)は意図を持って作られたものとして、視聴者自らが積極的に読み解く力を養うこと、これが新しい教育分野として近年注目を集めている。

メディア利用者(一般国民、視聴者、我々)はメディア

(テレビ番組)を見る力をつけ、番組に対して主体的に判断、批判する態度を養う必要がある。

メディアアリテラシーの教育はカナダ、イギリス、アメリカなどが先進国で、カナダでは小学生のラングエッジ(言語)、日本の国語に相当する時間に必須の単元として導入されている。一年生では「メディア(テレビ)」というのは誰かが作ったものである。「誰かが組み合わせたものである。」といったことを教え、四年生では「テレビカメラのアングルや距離は視聴者にどのような効果を与えるか?」といった実習が行われる。そのなかで、子どもたちはカメラマンはディレクターの指示があつて様々な角度から撮影している、また撮影しないという選択も出来るということを実習を通して体感、経験していく。子どもたちはテレビ番組は決定する人がいて、その決定によって、それに基づいた操作、演出によって作られたものだということを理解していく。日本では青少年の凶悪犯罪が起きるとテレビの影響が強いのはとよく言われる。犯罪はテレビ放送の規制だけで解決できるのではなく、学校、家庭、地域社会が一体となって取り組むことが必要である。テレビを主体的に見る力をそれぞれが身に付ける、今こそメディアアリテラシーが視聴者それぞれに求められている。

「受けての視聴者が厳しく、てごわい存在であればあるほど、送り手の放送局は評価に値する番組を制作し放送しなければ、視聴者の信頼を得ることができなくなる。」

OBS大分放送でテレビ番組の制作に携わっている私にとって、この言葉は非常に大きな意味を持っている。

(別府大学非常勤講師・OBS大分放送TV制作局長)